

---

## リリカルなのはsts ~ 元特別捜査官の場合 ~

ふげらー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのはstss（元特別捜査官の場合）

### 【Nコード】

N6383T

### 【作者名】

ぶげらー

### 【あらすじ】

管理局で固有スキル『メタモルフォーゼ』を駆使し特別捜査官をやっていた主人公は、自分の人生を歩むために転職を志す。

この物語は筆者の都合のいいような解釈、改変・・・いわゆる都合主義を多分に含みます。そのため原作レイプもかなりあります。それでもいいって方だけお読みください。

## プロローグ、転職します。(前書き)

この物語は筆者の都合のいいような解釈、改変・・・いわゆる都合主義を多分に含みます。そのため原作レイプもかなりあります。それでもいいって方だけお読みください。

## プロローグ、転職します。

ミッドチルダ郊外。

深夜、俺は人気の無い郊外を一人歩く。

手には、銀色のアタッシューケース。

顔には、夜だというのにサングラスをかけている。

いかにも今から秘密の取引に行きますという格好だが、本当にそうなのだから笑えない。

あたりに響くのは、俺が歩くカツカツという音と虫が鳴いている音だけ。

俺はチラリと背後を流し見、誰もいないことを見て安心する。

程なくして、目的の倉庫に到着した。

俺は大きなシャッターの横に備え付けてある通用口の前で立ち止まり、再度周りに人が居ないことを確認する。

あからさまに怪しいが、これがこの男の習性なのだ。

周りに人が居ないことを再度確認できた俺は、通用口のドアを開け倉庫の中へと入る。

「おそかったじゃねーか。例のブツはちゃんと用意できたんだろうな？」

倉庫内に入るとほぼ同時に、ひどくイラついた声を掛けられた。

声の主のほうを見ると、黒スーツの男が3人。その中でもやたらに

強面の男が吸っていたタバコを足で踏み消していた。不機嫌オーラを隠そうともしないその男にビビリ、思わず俺は声が上がってしまう。

「こ、ここにありません。い、今までに無い大きな取引なもので、後をつけられてないかどうか気になって・・・す、すいません。」

「うち・・・、相変わらずビクビクしやがって・・・。そんなところに突っ立ってねーでさっさと持ってこいや。」

「は、はひっ！」

入り口で立ち止まっていた俺は、促されるままに強面の男へと寄りていく。

その間も、俺は挙動不審に倉庫内を見回す。

倉庫奥にもある出入り口に2人。

キャットウォーク部分には、窓から外を見ている男がこれまた2人。ちなみに、俺が入ってきた入り口にも2人いた。

少なくとも倉庫内部には9人。外にも多少はいることだろう。

「お前みてえなビビりが、よくこの世界で生き残ってるな。まあ、ブツの質は評価できるがよ。あと、お前そのサングラス死ぬほどにあってねーぞ。」

男のそばまでやってきた俺は、手に持っていたアタッシュケースを乱暴にひったくられた。

「こ、これは他の人になめられないようにって・・・。」

「おい、中身確認しろ。」

俺の言葉は全くの無視で、後ろに控えていた仲間の一人にアタツシユケース放り投げる男。  
男の仲間は、難なくアタツシユケースを受け止めると、そばにあった机に置いた。  
そして、ケースの留め具を外す。

「あと、突然の目くらましに対応できたりするんだぜ。」

ケースを開いた瞬間、倉庫の中は閃光に包まれた。

「なっ!?!?てめえ!?!」

突然の目くらましにひるむ男たち。  
こちらは、このための特製サングラスのおかげで強烈な光の中でも余裕である。

まず目の前に居るリーダー格を含めた男たちを、顎に一撃ずつで殴り倒し、脳震盪を起こさせる。

さすがに荒事には慣れているようで、既にキャットウォークに居る2人、前後の入り口に居る4人全員がデバイスを取り出している。

全員が魔導士か。

『Shoot Barrett』

すぐさま自分の片手剣型アームデバイス『SSV3』を呼び出し、キャットウォークに居る2人を魔法弾で撃墜する。と同時に、倉庫内の遮蔽物に俺は身を隠す。

閃光が止んだ。

残りは4人。

「どこいきやがった、ゴラアああ!？」

遮蔽物を利用しながら、すばやく前入り口へと移動する。

制圧は可能な限り速やかに。

遮蔽物で十分に近寄れた俺は、前入り口の2人へと襲い掛かる。

『Shoot Barrett』

再び魔弾を各人一つずつ、2発牽制に放つ。

シユートバレットは、初歩中の初歩の魔法ではあるが、速射が効き重宝する。

防御のために硬直が起きた二人へと肉薄し、1人目を顎への打撃で沈め、そのまま勢いで体勢を整えつつある2人目のデバイスを、右手に握るSSV3で払い容赦なく蹴りを叩き込む。

そしてすぐに遮蔽物へ隠れる。

残り2人。

そろそろ敵も混乱から回復するだろうか。

『Fake Silhouette』

再び雑多な倉庫内の遮蔽物を利用して敵に近づきながらも、自らの幻影を作り出す。

さあ、仕上げといこう。

まず幻影が敵前へ踊りでる。

幻影は十分に敵の目を引き付け、更には攻撃を受ける変り蓑となる。まあ、攻撃受けると消えるんだがな。

だが、今はそれで十分。

攻撃を放った後の硬直と、掻き消えた幻影に対する驚きに見舞われている2人はいいのだ。

一気に踏み込み懐にもぐりこんだ俺は、残りの2人も打撃により意識を刈り取った。

「よし、制圧完了と・・・。」

『時空管理局だ！麻薬取引の現行犯で逮捕する！』

俺が一息つくと同時に、バーンと勢いよく扉が開き目の前にゾロゾロと管理局員がなだれ込んでくる。それはいい。

待機させていたこいつらに、閃光と同時に現場への突入を指示したのは俺だからだ。

だが、俺は今部下であるはずの局員に武器を向けられていた。

「おっと、しまった。変身を解いていなかった。」

そこでようやく今の自分の姿のまずさに気がついた俺は、固有スキルの『メタモルフォーゼ』を解く。

「管理局特別捜査官の、ケイスケ・サルトビだ。」

変身を解いて容姿が変わったことと、名乗ったことで局員たちがようやく武器を下げてくれる。

味方にやられたんじゃないからな。

これでようやく、本当に一息つける。

「あとは、現場指揮官に任せて俺は引きあげるよ。がんばってくれ。」

潜入捜査官の俺は、最後の詰めの大捕り物ではその前段階の手引きまででお役御免だ。

ポンッと局員の肩を叩いて俺は家路へとついた。

翌日。

長かった潜入捜査が終わっても、休暇が取れるわけでもなく俺は管理局本局へと足を運ぶ。

「1年振りのオフィスか。懐かしいというよりも、新しい職場って感じた。」

潜入捜査にも色々形態はあると思うが、俺の場合は潜りっぱなしだ。

特に今回のヤマは大きかったせいもあり、1年も潜りっぱなしだった。

そのかいもあり、今回はかなり大きな組織を潰す足がかりとなった。

昨日俺が関わったのは麻薬取引現場だったが、裏では更に大き捕り物を行っていたのだ。

「そして報告書もタンマリださないといけないと・・・。」

一年にも及ぶ捜査の総決算による書類がどの程度になるのか考えるだけで憂鬱になる。

鬱々とした気持ちで、自分の席へと向かうがなぜかそこには緑髪の新客が座っていた。

「やあ、ケイスケ君。少し僕に付き合ってくれないかな？」

出勤してすぐにオフィスを抜け出すことになるとは思わなかったが、今は共同スペースで腰掛けてコーヒーを啜っている。

「それで、何か用ですかヴェロツサ・アコース査察官殿。」

「そう、邪険にしないでくれないかな。昨日は大活躍だったようじゃないか。」

目の前に座る局内でもやり手と噂される査察官殿は陽気に笑っているが、腹の底じゃ何を考えているか分からない。

こういう輩が経験上一番やりづらい。

「はあ、一応褒め言葉として受け取っておきます。」

「素直に褒めているんだよ、その証拠に」「お断りします。」「ま

だ何も言っていないじゃないか。」

「どうせ、査察官を目指さないかとも言うんですけど？もう何回も聞きましたよ、それ。」

アコース査察官は、何度かこんな風に俺を勧誘に来ている。

俺の階級は一尉。

これでも、同年代でかなり高い位置に居ると思っているがこの人は査察官だ。

ぶっちゃけこんな邪険に扱っていい相手ではないが、あまりにしつこいのでいつの間にかこうなってしまうていた。

まあ、そんなことを気にするような人では無いのだろうが。

「大体、査察官なんて俺には無理ですよ。」

「君のレアスキルは査察官に向いているよ。そして、君自身が今まで培ってきた技能もだ。もし本気で君が目指せば査察官なんて楽勝さ。どこの部署も有能な人材は常に欲しているんだよ？」

簡単に言ってくれる。

俺の固有スキル『メタモルフォーゼ』

名前の通り、変身能力だ。

ぶっちゃけ変身魔法なんかは、幻術系の応用でどうにかなるので一定のスキルをもつ魔導師ならば誰だって出来てしまう。

だが、普通の魔導師は使わない。

一つは倫理的に問題があるからだ。

二つ目には、単純にばれてしまう事だ。

幻術系の魔法は注いだ魔力によって精度が変わる。

姿形を見せるだけならば、ホログラムのようなものでもいいかもしれない。

だが、それでは触れば一発ではれるし、粗さも目立つ。逆に魔力をたつぷり注いでやれば、限りなく本物に近づくだろぅが、スタミナの問題がある。

それにどれだけ魔力を注ごうが、解除系の魔法をかけられれば一発である。

魔力だけの問題でもない。

幻術は使用者のイメージの投影であるが故に、イメージが崩れないように常に一定の集中を要求される。

正直、リスクばかりが高くて潜入捜査で使えるような魔法ではない。

だが、俺のメタモルフオーゼは違う。

一度発動すると、その姿形に固定されてしまうのだ。

魔力の枯渇で変身が解かれることも無い。解除系の魔法も効かない。原理は分からない。

ただ、うちの家系の人間に稀に現れる能力で、先祖の”ニンジャー？”がこの能力でうんたらかんとらとか聞いたことがある。

まあ、とにかく俺はこのスキルを使って割と幼いころから特別捜査官となつて管理局で働いていて、それがこの査察官殿の目に留まつたらしい。

でも、まあ……

「残念ですが、俺が査察官になることは永久にありませんよ。まだ誰にも話してないですが、俺この仕事を辞めるつもりですから。」

「へえ……、それはまたどうしてだい？」

アコース査察官の目が鋭くなる。

「いつまでもこんな危ない橋を渡る仕事やってられないですよ。．．．  
．．．まあ、それが一番の理由なんですけど．．．。」

「何かまだ理由が？」

「ええ。．．．まあ、ちょっとした笑い話になっちゃうんですけど、昨日の捕り物を終えたときに、俺『本当の』自分の姿にすぐに戻らなかつたんですよね。アコースさんは、役者が役にのめり込み過ぎてアイデンティティーの崩壊を起こすっていう話聞いたことありませんか？約一年間も『他人』やってたせいで、味方のはずの管理局員に囲まれてようやく気がついたんですよ。そして、ケイスケ・サルトビって自分で言った名前が他人の事のように聞こえたんです。そのときに、『あー、俺って自分の人生生きてないなー』って思ったんですよ。」

「．．．なるほどね。．．．ふむ、そういう話を聞くと、さすがの僕でも引き止めるのをためらってしまうね。でも、それならば特別捜査官を辞めて、武装隊にでも入るといい。君はレアスキル抜きにしてもSランクの魔導師だ。引く手あまただろうに。」

「はは、だから危ない橋を渡りたくないって言ってるじゃないですか。」

「おっと、そうだったね。」

アコース査察官のおどけた仕草に少し空気が緩んだような気がしたが、そうでもなかった。

2人して黙り、コーヒーを啜る音だけがする。その沈黙を破ったのはアコース査察官だった。

「・・・まじめな話だ。君のレアスキルは倫理的にアウト、というか法律で禁止だ。それに色々な大人の事情も絡んで、監視やらなんやらが付いて自由が制限されるだろう。それでもいいのかい？」

それは転職を考えた時点から頭に浮かんでいた懸案事項だった。

「まあ、それも仕方ないかなって。管理局には今までかなりの額稼がせてもらいましたからね。これからはそのお金を元手に何か店でもやってみようかなって思ってますよ。」

「・・・そうか。残念だね、君のような才能を失うのは。」

「まあ、褒め言葉として受け取っておきますよ。何の店をやるかは決めてないですけど、開店したら来て下さいね。サービスしますよ。」

「ああ、そうさせてもらおうよ。」

この会話の2カ月後、身辺整理を済ませた俺は管理局を去るのだった。

ブログ、転職します。(後書き)

とりあえず、お店はベース飲食で考えてますが、物語が進むうちに色々追加されてゴチャゴチャさせるつもりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6383t/>

---

リリカルなのはsts～元特別捜査官の場合～

2011年10月9日04時45分発行